

「自閉」という言葉の由来と概念の変遷

本田 秀夫

精神科医でなくても「自閉」という言葉をご存じの先生方が多いと思う。この言葉は、スイスの精神医学者オイゲン・ブロイラー (Eugen Bleuler) による造語 ‘Autismus’ の訳語である。英語では, ‘autism’ となる。ブロイラーは、これを「連合弛緩」, 「感情障害」, 「両価性」とともに統合失調症の4つの基本症状のうちの1つに位置づけた。ギリシャ語の ‘autos-’ (自己) と ‘-ismos’ (状態) を組み合わせて作られており、現実生活から退却して、自己中心の空想的な精神生活が優越する精神状態をイメージしたものと考えられる。

私は医者になって4～5年目の頃、これを日本語で「自閉」と翻訳したのが誰なのか疑問に思った。当時の児童精神医学の重鎮の先生や精神医学史の専門家に直接訊いてみたが、誰にもわからない。当時90歳になられていた元東京大学精神医学教室教授の秋元波留夫先生に手紙を出して訊いてみたところ、FAXで返事をいただいた。それによると、1937年に日本精神神経学会が「神経精神病学用語統一委員会試案」を初めて作成したときに秋元先生は編集委員長をされていたそうで、その中に ‘Autismus’ の訳語として「内閉性、自閉性」と記されているのが、「自閉」の初出であろうとのことであった。ただし、誰が「自閉」の名称を考案したのかは、秋元先生にもわからないとお返事だった。私が思いつく限りで最も先輩だった秋元先生がわからないとなると仕方ないと思ひ、しばらくそのことは忘れていた。

10年ほどたったある日、当時私が一緒に仕事をしていた清水康夫先生（横浜市総合リハビリテーションセンター）が、「『自閉』と翻訳した人がわかったよ」と言って、ある本を持ってきてくださった。それは、秋元先生より一代前の教授の内村祐之先生が書かれた「わが歩みし精神医学の道」（みずす書房、1968年）という本であった。その中に、「……精神医学—従来の精神病学に代えて—や自閉症などの訳語は、この時（註：上記の統一用語試案の作成時）に私が提唱したものであった」と書かれていたのである。もう絶版になっていたその本を、清水先生が家の書棚で偶然手に取ったことから、私の10年来の疑問の答えが見つかったのであった。昭和初期のまだ抗精神病薬が発見されていない時代に、統合失調症に見られる対人関係の異常に対して「自閉」の名称を充てた言語感覚は、実に鋭いものであった。

わが国で統一用語試案が出されたちょうどその頃、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学に世界初の児童精神医学講座が開設され、レオ・カナー (Leo Kanner) が初代教授に就任した。カナーは当時、統合失調症と同様の対人行動の異常と同一性保持への著しい執着を示す子どもたちの存在に気づき、1943年に11例の症例報告を発表し、翌年に「早期乳幼児自閉症 (early infantile

autism)」と命名した。名称に‘autism’を用いたのは、児童期に発症する統合失調症の一種である可能性を考えていたからである。その後の研究で、1970年代以降は、カナーが提起した早期乳幼児自閉症は生来性の発達の異常であり、早くても前思春期以降に発症する統合失調症とは異なるものであるとの認識が広まった。

1980年代以降、精神疾患の診断についての考え方が、個人の内的な心理状態を推測して行うのではなく、他覚的な言動によって操作的に行うことを優先する方向に進んだ。この流れの中で、主として心理状態の記載からなるプロイラーの基本症状を統合失調症の診断基準に直接用いることが難しくなった。現在用いられている国際的な診断基準では、統合失調症に関連する診断名や症状の中に‘autism’の用語は1度も登場していない。一方、統合失調症とは別のカテゴリーである神経発達の障害のグループの中に‘childhood autism’あるいは‘autistic disorder’の名称で‘autism’が残ったのである。当初は統合失調症の症状の1つであった‘autism’が、統合失調症の文脈では全く登場しなくなり、神経発達の障害という全く異なるジャンルの診断名としてのみ残ったことをプロイラーが知ったら、どのような感想を抱くであろうか？

一方、autismの概念が国際的に大きく拡大してきたという経過も見逃せない。1970年代後半に行われたイギリスのローナ・ウィング (Lorna Wing) による大規模な疫学調査によって、autismにはほとんど他者と交流しない「孤立型」だけでなく、受動的には応答するが自ら他者に関わりを求めることの少ない「受動型」、さらには能動的に対人行動をとるが一方向的で相手との相互関係にはなりにくい「能動・奇異型」が存在することが示された。またウィングは、「能動・奇異型」の延長に、流暢に言語を駆使するが臨機応変な対人交流が苦手なアスペルガー症候群というタイプが存在することも指摘し、これらとその周辺群をまとめて‘autistic spectrum」と呼んだ。これが現在の「自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder)」の由来である。

わが国でも今や「自閉スペクトラム症」はごくありふれた状態として、全国で子どもから大人まで診断される人たちが後を絶たない状況になっている。一方でわが国では、訳語が「自閉」のままであることによって、今なおさまざまな誤解を受けることが多い。「閉」の文字があるために、「暗い性格」「ひきこもり」「うつ」などと誤解され、きわめて深刻で思い病気であるようなイメージを抱く人が多いのである。もちろん、カナーが最初に報告した孤立型の対人行動が主となり、知的障害も併存している人たちでは、通常の学業生活や職業生活に就くことが難しく、福祉サービスの対象となることも多い。しかし、そのような場合であっても、性格が暗いわけでもないし、人を避けるわけでもない。本来の自閉スペクトラム症の人たちは、どちらかという裏表のないサバサバとした性格である。いわゆる「忖度」とは無縁で、専門家の間では「本当は『自閉症』と言うべきではないか」と話すほどである。元の‘autism’には、おそらくそんなに暗いイメージはないのではないかと思う。そろそろ、「自閉」という言葉に代わる別のよい日本語がないだろうか、と折に触れて頭を悩ませているところである。

(信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授)